

# 情動に伴って変化する食行動のメカニズムを探求する研究

## グループ紹介

研究代表者：安井幸彦(医学部・教授)  
津森登志子(医学部・准教授)，中村佐和子(医学部・大学院生)

## 概要

憂鬱なときには食が進まないなど、情動(喜怒哀楽)に伴って食行動が変化することを、私たちは日頃からよく経験しています。しかし、その変化がどのような脳内メカニズムによって形成されるのかはよく分かっていません。そこで、私たちの研究室では視床下部における摂食関連ニューロンと情動発現の中核として注目されている扁桃体との連絡様式を分析することによって、このメカニズムの解明を目指しています。

## 特色 研究成果 今後の展望

50年以上前から視床下部は食行動の調節にとって重要であることが知られています。そして、近年の分子生物学の発展によって、視床下部には摂食を促進あるいは抑制する様々な神経活性物質やその受容体を有するニューロンの存在が明らかになってきました。また、脂肪細胞から分泌されるレプチンというホルモンがこれらの視床下部ニューロンに作用して摂食量の減少やエネルギー消費の増加をもたらすことが明らかとなりました。一方、近年扁桃体が情動発現の中核として注目され、扁桃体からの出力によって情動に伴う身体の様々な機能の変化が引き起こされると考えられています。そこで、私たちは扁桃体の出力が視床下部において、どの神経活性物質や受容体を有する摂食関連ニューロンに、どのような連絡をするのかを、形態学的立場から分析することによって、情動に伴って食行動が変化する場合の脳内メカニズムの解明に迫りたいと考えています。さらに、情動発現の調節に関わる大脳皮質領域と視床下部摂食関連ニューロンとの連絡様式や、痛みによる食行動抑制の神経機構などについても分析を進めて、脳における食行動調節機構の包括的理解を目指します。

